

(1) 調査の目的 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。	(3) 調査内容 ①教科に関する調査 ・小学校【国語・算数・理科】 中学校【国語・数学・理科（CBT）】 ②質問紙調査（児童生徒に対する調査、学校に対する調査）	【今年度調査の特徴】 ※今年度の教科に関する調査は、小学校で国語・算数・理科、中学校で国語・数学・理科を実施。 ※中学校理科は、令和7年度より、オンラインによる実施（ComputerBasedTesting）＊学校ごとに異なる問題が出題 ※中学校理科の結果は、IRTスコアで提示。 IRT→児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかコンピューターが区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。（反応項目理論）
(2) 対象学年 〈小学校第6学年 市内16校〉 〈中学校第3学年 市内8校〉	(4) 実施日 令和7年4月17日（木）	

学力調査結果

平均正答率(%)

小学校

	富田林市	大阪府	全国
国語	62	65	66.8
算数	54	58	58
理科	52	55	57.1

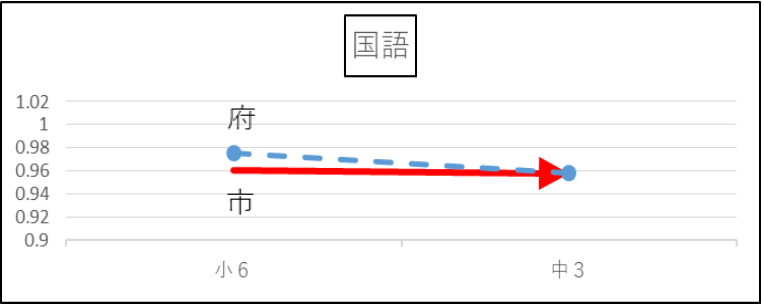
無解答率(%)

小学校

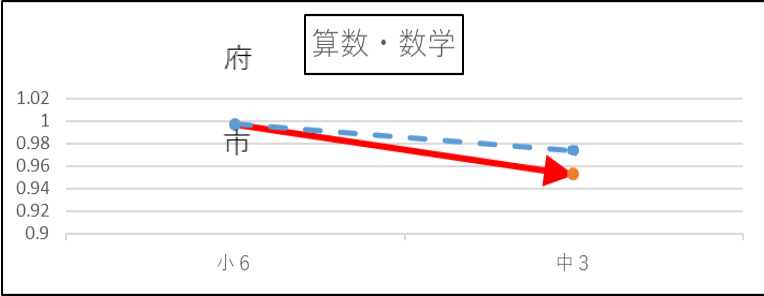
	富田林市	大阪府	全国
国語	3.6	3.4	3.3
算数	3.1	3.7	3.6
理科	2.6	3.2	2.8

小6から中3にかけて

下のグラフは、本年度の中学校3年生について、令和4年度に小学校6年生で実施した全国学力・学習状況調査の結果と、本年度の調査結果を比較し、富田林市の平均正答率と全国公立の平均正答率との差がどのように変化したかを表したものです。



平均正答率(%)	富田林市	大阪府	全国公立
●R4（国語）	63	64	65.6
◆R7（国語）	52	52	54.3



平均正答率(%)	富田林市	大阪府	全国公立
●R4（算数）	63	63	63.2
◆R7（数学）	46	47	48.3

各教科の状況

※（ ）内の数値は全国平均

小学校 国語	領域	富田林市	平均正答率(%)
	話すこと・聞くこと	60.7	(66.3)
	書くこと	64.0	(69.5)
	読むこと	52.4	(57.5)
小学校 算数	領域	富田林市	平均正答率(%)
	数と計算	59.0	(62.3)
	図形	51.8	(56.2)
	変化と関係	53.2	(57.5)
小学校 理科	領域	富田林市	平均正答率(%)
	エネルギー	43.0	(46.7)
	粒子	47.4	(51.4)
	生命	45.7	(52.0)
中学校 国語	領域	富田林市	平均正答率(%)
	話すこと・聞くこと	49.7	(53.2)
	書くこと	51.2	(52.8)
	読むこと	61.3	(62.3)
中学校 数学	領域	富田林市	平均正答率(%)
	数と式	43.0	(43.5)
	図形	43.7	(46.5)
	関数	47.2	(48.2)
中学校 理科	領域	富田林市	平均正答率＊(%)
	エネルギー	53.3	(56.1)
	粒子	60.4	(61.7)
	生命	44.8	(44.8)
中学校 理科	地球	33.3	(37.3)

＊全国の解答状況に基づき算出された予測正答率で記載

○・・・全国平均同等、上回った主な内容

△・・・全国平均を下回った主な内容

※〔 〕内は問題番号

小学校国語・・・「言語の特徴・使い方」の領域が全国平均を上回っている。

○話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるか。〔1三（2）〕

△目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けられることができるか。〔3三（2）〕

→登場人物の立場を通して、文章全体の構成を捉えて要旨を把握するとともに、目的に応じて、必要な情報を取捨選択したり、整理したり、再構成したりし、分かったことなどをまとめることが重要である。

小学校算数・・・「数と計算」の領域は全国を下回っているものの、改善傾向にある。

○伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができるか。〔4（1）〕

△目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるか〔1（2）〕

→日常の事象について、必要なデータを収集し、棒グラフの項目間の関係を読み取ったり、目的に応じて適切なグラフを選択して考察したり、表から導いた結論の根拠となる数に着目したりすることが重要である。

小学校理科・・・「エネルギー」の領域は全国を下回っているものの、大阪府に迫っている。

○水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識をもとに、概念的に理解しているか。〔4（2）〕

△身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身についているか。〔2（1）〕

→身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることを理解していることが大切である。
そのため、自然の事物・現象と知識を関係付け、理解を深めることが大切である。

中学校国語・・・全国に及ばないものの、「書くこと」「読むこと」の2つの領域で大阪府を上回っている。

○文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えることができるか。〔3二〕

△資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるか。〔2四〕

→スライドを使った話し方の工夫や聞き手の反応を踏まえた話し方の工夫を捉えるとともに、自分の考えが分かりやすく伝わるように、話す事柄の順序を考えたり、スライドを用いて表現を工夫したりすることが重要である。

中学校数学・・・全国に及ばないものの、「数と式」「関数」の2つの領域で大阪府を上回っている。

○多角形の外角の意味を理解しているか。〔3〕

△相対度数の意味を理解しているか。〔5〕

→不確定な事象についてデータに基づいて考察する場面において、「数や式、表、グラフなどを活用して、数学的に処理すること」、「相対度数の意味を理解していること」が重要である。

中学校理科・・・「粒子」「生命」の2つの領域で大阪府を上回り、「生命」においては全国平均に（CBT調査）達している。【予測正答率】

○気体の性質に関する知識が概念として身についているか。〔4（2）〕

△土地の様子とボーリング調査の結果を関連づけて、地層の広がりを検討して表現できるか。〔8（2）〕

→地層の様子やその構成物などから地層のでき方を考察し、重なり方や広がり方についての規則性を見だし、地層とその中の化石を手掛かりとして過去の環境と地質年代を推定できることを理解することが重要である。

※ 中学校理科の正答率は、「予測正答率」となり、各学校で出されなかった公開問題について、全国の解答状況に基づき、各生徒と同程度のIRTスコアにおいて期待される正答率を示しています。